

アイ狂言の「笑い」

小田 幸子

アイ狂言(以下アイと略称する)に含まれる笑いの要素や滑稽な演技は、時代とともに減少し、希薄化していったようである。へ殺生石もその一例に挙げられる。

へ殺生石のアイ(能力)の役割は二つある。那須野の原に到着後、石の上を飛んでいた鳥が地面に落ちたとワキ(玄翁)に告げることと、中入後、玉藻前の物語を語ることである。さて、江戸初期以前の書写と推定される『あい之本』(鴻山文庫蔵。約43番のアイの文句や概要を記す。流儀不明)に次のような記述があった(句読点濁点・カギカッコを加えて引用する。以下も同じ)。

ほつすをかたげて出る。たれをゆい付て出る。ワキなすの、はらへつてから、してばしら一問程をき、はしが、りにて、「ありやく」とゆふ。わきがあいしらいをしかる。「さてくふしぎな事が御座る。がんが一村参と存て御座れ、あの石のそばへ参と存て御されば、ぼつた

り／＼とをちて御さる。あれを以参まし(マツ)て、ばんのおひじのおしるにいたすまじやう」とゆふ。わきしかる也。擬せつしやうせきの事とう。かたる也。

アイの役割自体は現行と同じだが、「あの落ちた雁を拾ってきて、晩御飯のお汁にしましよ」という傍線部Aのセリフは現在では言わない。「おひじ」は「非時」で、僧の午後(マツ)の食事)。このセリフは笑いを誘う。今まで空を飛んでいた雁の群が石の上に来た途端に落ちてしまうという不思議な出来事に遭遇した場合、普通ならば原因を究明しようとして、石に注目するであろう。筋の流れからも、それが自然である。ところが、予測に反して、アイの関心は謎の解明には向かわず、落ちて来た雁を食糧にすることの方に向う。予想される展開やその場の中心主題からのズレ、シリアスな出来事から卑近な日常的発想への落差などが笑いを引き起こす要因であろう。いかに狂言の世界の人物が言いそうな、とぼ

けたセリフである。

元文四年本間久近書写の『鶯流間狂言付』(鴻山文庫)にも「アレ成火石ノ上へ雁ガ喰ヨウテ落マスル程に、取ッテ参リ、オ料理ニ仕ウズル」と記すので、これは『あい之本』だけの特殊な例外ではなかった筈である。しかし、管見では右の二例しか見当たらず、アイの本として最古のものに属する寛永十六年大藏虎清奥書の『間・風流伝書』(鴻山文庫)や貞享二年奥書の『貞享松井本』にも、また江戸中・後期の他の諸本にも見えない。少なくとも江戸初期以前の一形態であったAの文句は、江戸後記には完全に廢れてしまったといつてよいだろう。その理由は、ここに含まれている「笑い」のためだと思う。

この段のアイの主要な役割は、近付くものの命を取る殺生石の恐ろしさを具体的に示し、不思議な石に観客の注意を引き付けておいて、「その石に近付いてはならない」と呼び掛けながらシテが登場する場面へと効果的につなぐことにある。寂寥とした那須野の原で語られる妖気漂う物語の導入部にあたってなのである。その意味から言うるとAは必要不可欠なセリフではない。というより、ここで笑わせてしまうと、以下の展開の効果をそいだり、全体の雰囲気損なうことにもなりかねない。そのような判断が働いた結果、「ア

ノ石の上へ鳥がふら／＼と落ちて其儘空敷成て候が、ふしぎ成事にてハなく候か。(能楽研究所蔵、天保十五年『大蔵流間語集』)のよ
うな無難な形に淘汰されたのだろう。

同様な事例として、『あい之本』に記す入藤戸ノ久羅生門も挙げておこう。前者のアイは、悲しみに沈むシテを慰めながら暮へ送り込んだ後、管弦講の際には自分も何か一役担当したいとワキに頼み、管弦後の酒宴で「大さかづきを以、五はいも十はいもくだされて、舟ぞこにとつてねまらして、いびきのやくを仕ましやう」(B)と提案する(同種の文句は『貞享松井本』にもある)。後者は、早打アイ二人が登場して、

「きいたか／＼」とゆふてぶたいを一遍まわる。…二人ながら色／＼ゆふべし。一人ハ「おれもいこ／＼やどへいこ」とゆふて、はいる。後物も色／＼ゆふて、「おれもいこ／＼」とゆふて、「やどへいこ」とゆふてはいる也。

というものである。右は他の本に見えない形だが、多分、渡辺の綱の従者二人が主人に同行すべきか話し合い、いろいろ理屈をつけて結局二人とも宿へ帰ってしまうのであろう。早打アイが一人だけ出て、綱が供を連れずに羅生門に赴くことを聞きつけ、「これは幸ひな事じゃ」と帰る現行の形より、アイの臆病

ぶりが明確で、滑稽味が強いと思う。

Bは、沈痛な前場の内容に笑いがそぐわな
いために廃れたのだろう。(羅生門)は、アイの形式自体の類型化・簡略化に伴って滑稽性も希薄化したケースであろうか。いずれにしても、以上の三例は、アイの文句の固定化と並行して、滑稽なセリフや演技が徐々に失われる傾向にあつたことを推測させる。右以外でも、たとえば、(三井寺)のアイが、鐘を衝こうとするシテを制止して、自分は「此寺の鐘つくつく法師」などと答える一連の文句が江戸後期以降の観世流で無くなつてしまつたことが、宝暦頃、驚流の『諸流間古書』(能楽研究所蔵)その他から知られる。

『習道書』の「又、信の能の道やりをなす事、笑はせんと思ふ宛てがひは、まづあるべからず。たゞ、その理を弁じて、嚴重の道理を一座に云聞かするを以て道とす」というアイの役割に関する世阿弥の意見は、戯曲内容や場面展開上の必然性を逸脱しかねないようなアイの笑いが、現在以上に頻繁に行なわれていた事情を反映していよう。見方を換えれば、戯曲の筋道から外れても、その場その場での笑いを楽しむような享受の仕方や作品の作り方が比較的許容されていたとも言える。

(法政大学能楽研究所員)